

(2) 「獣医師が支援する動物介在教育」

群馬県獣医師会、群馬県教育委員 桑原保光

(子どもを育てるなら群馬県)

群馬県獣医師会では、平成10年度から県内で希望する小学校や幼稚園の動物飼育指導を実施しております。連携をとっている獣医師という立場で、幼稚園の飼育指導や、特に今日は小学校の生活科の動物飼育等の体験指導について、お話をさせていただきます。

群馬県では、ここにもありますように、「子どもを育てるなら群馬県」ということで、県政の姿勢自体が子どもに力を置こうという方針でいます。そこで、平成10年に全国の新聞に1面広告で、「小学校に獣医師さんを校医としておきます」ということを発表しました。このことは、せっかく学校で動物を飼っているのであれば、子どもが怖がらずに動物にさわられるような教育指導が重要ではないかということで、始まりました。実際に、群馬県の小寺知事がふれあい教室にも参加しながら、子どもが学校や幼稚園で飼っている動物をかわいがりながら、楽しい動物飼育指導を、是非獣医師にお願いしたいということで、平成10年度から始まりました。

では、獣医師が支援する小学校の動物介在教育とは何なのかと考えますと、実際、動物介在教育という言葉はみなさんが聞き慣れないことで、海外で、人と動物の関係学というなかで、「アニマル アシステッド エデュケーション」というものがあり、直訳すると動物介在教育ということになります。簡単にいえば、学校での飼育＝動物を介した教育ということです。学校で動物を飼うときには、ペットとして飼うのではなくて、教育の一環として飼うという位置づけをしようということです。

(養育心の育成と命の教育)

では、学校での動物飼育に、今一番何が必要かと言うと、群馬県では養育心の育成と命の教育を、学校現場で動物を飼うことをとおして行ったら一番いいのではないかと考えております。その中で、特に動物飼育の基礎基本を、学校の先生方は専門家ではないので、勉強してこなかった、ということが大きな課題になっているということが、群馬県の学校と連携をとることによってわかってきました。では、**基礎基本**というのはどういうことかということ、動物を子どもたちにさわらせたり、ふれさせたりするのに、幼児教育の現状と動物飼育という観点から本当に考えているのだろうか、という疑問が一つあります。二つ目に、**児童の発達心理と、動物のかかわり方**をどうしたらいいか、何歳児がどういう動物を好んで、どういう時期にどういうことをやってあげたら子どものためになるのだろうか、ということ、考える時代になったと思います。三番目には、**ヒトと動物の関係**について、先ほど唐木先生のお話にもありましたが、イヌが、人間の近くにきたのが1万年前です。そこで、家畜、ペットと、いろいろな状況について、よくその基礎基本を指導者が勉強しなければいけない時代に来たと考えます。最後に、**飼育管理方法**について、もう、**基準を作らない**と、学校や幼稚園の飼育において、先生それぞれの自己的な限界があり、「私は動物飼育はこうやりたい」という幅がたくさんあるので、それを統一するにはどうしようかということから、獣医師の立場で考えるようになりました。

ここにもありますように、これは、高知県原産のプチッコというニワトリです。手乗りニワトリといって、800gくらいで、手に乗って、おとなしくしているような、こんなかわいい動物と、楽しい時間を過ごさせてあげることが、幼児教育において一番大切なことです。この延長線上に小学校で飼育をどうしたらいいか、ということと考えますと、やはり、小学校で指導者が、子どもと、「たのしいね」、「かわいいね」というように、楽しさを共有できるような指導者がいないと、子どもは共感を持つことができません。そうすると、子どもの発達の状況に悪影響を与えるということがいわれています。

では、**小学校ではどうしたらいいか**ということ、先ほどお話ししたように、やはり、養育心の育成をして、子どもたちが自主的に飼育に携わるような指導が必要だと思えます。その指導によって、「動物がかわいい」と子どもたちが感じるようになってはじめて、本人たちは「放っておけない」、「僕たちが面倒を見なければ死んでしまう」というような存在に動物をすることが、小学校生活科のスタートラインに立たせることです。放っておけない飼育をさせるには、**まず、「かわいい」と思わなければ、スタートラインにつけないんだという意識を教育者がもっていないと、うまくいかないということになります。**是非、スタートラインに立たせられるような動物飼育の基準をつくっていかうということで、考えてみました。

では、その放っておけない存在になった動物ということになれば、指導者のいろいろな問いかけに興味関心を抱くようになるわけで、たとえば、「ニワトリにも耳があるの?」と問いかければ、「ニワトリにも耳があるよ」などと答えるようになるわけです。このように、動物の命について、直に理解ができるようになるのです。

では、動物飼育で感性が育つといいますが、実際、どうすれば感性が育つかというと、先ほど説明したような、放っておけないかわいい動物を飼育するなかで、いろいろな感情体験、たとえば死んでしまったりすることもあるでしょうが、そういう感情体験のなかで、子どもたちは生命観を育んでいくはずで、二番目には、自分の役割がどうだったのか、責任を通じた飼育の体験が、心にいろいろなことを響かせて、「こんなことをしてはいけないんだ」、「塾があるからといって、エサや水をあげないと死んじゃうんだ」というような倫理観をもつようになるわけです。そんななかで、いろいろな経験をしながら社会性を身につけたることによって、人格形成を伴った成長を続けていくわけです。こういう体験を小学校低学年の生活科飼育で実践していく必要があると考えます。

では、学校の現場を見るとどうでしょうか。これは、群馬県のある小学校の事例です。よく見ていただくと、ウサギがいっぱいいますよね。ここにはいろいろな考え方がありまして、「いっぱいいいなー」、「自然に死んでしまうのも仕方がないよ」という教育者もいます。生まれるのも自然、死ぬのも自然、この「自然」という言葉に逃げているのではないかと思うのです。動物飼育の難しさは、多頭飼育や、動物舎の構造が原点なんです。そして、このような多頭飼育の入り口には、「○○動物園」とか書いてあったりします。学校に動物園があって、何か役に立つの？と聞きたくになります。このようにいろいろな問題を秘めているのです。すなわち、先生方が自分の好き勝手に、「動物飼育はこうあるべきなんだ」という考えをもったまま飼育が行われているわけです。保護者から見れば、動物虐待だとか、こんな飼育をして、教師の資格があるのかとか、いろいろ指摘されるような問題が、ここにはあるので、これは、きちんとした飼育基準がないから、各個人の先生方が自分の経験や判断でしてしまうことによって起こることなのです。

この（多頭飼育の）様子を観察している子どもを見てみると、「気持ち悪い」、「さわりたくない」という態度を見せている子もいれば、「おもしろいなー、つかまえてやろう」などと思って近づいていく動物好きの子もいます。また、呆然としている子どももいたりします。このように、いろいろな感覚を抱いている子どもがいるということを理解して、学校の授業でやっているんだから、やはり、嫌いな子も何か得るものがあるような勉強をさせることが、指導者の双肩にかかっているといえるのです。

この写真をよく見てください。本来、アナウサギは、耳が二つあるわけです。またここ（耳の後ろ）は本来は毛が生えているわけです。これは、先ほどの多頭飼育でよくあることですが、「金網デスマッチ」の結果起こってしまったことです。自然に穴を掘る姿を見せるのがいい、という人もいますが、多頭飼育では、テリトリー争いの殺し合いをしているんです。このウサギを抱くと「キー、キー」って鳴くんです。年中いじめられているものだから、すべてから逃げようとしているんです。こんな状況を飼育委員の子どもが見ているわけです。「ウサギさんはかわいい」、「うちの学校にはウサギさんがいるんだよ」などと思っている1年生が、こんな状況をみて、どう思うと思いますか。教育的にいい影響があると思いますか。やはり、学校の飼育というものは基準をつくって、きちんと飼育していかなければなりません。学校で飼育されている動物は、「学校の動物」という認識が強く、「みんなの動物」という意識が薄いと思います。これを改めていかなければいけないと思います。学校は、命の対応をしっかりとしていく必要があると思うのです。

（教育大学生への講義）

この写真は、群馬大学の生活科飼育講義の様子です。ウサギが苦手な子にはどのようにするかということを考えてみると、せっかく学校にウサギがいるんだから、タオルを使って抱いてやれば、抱けるようになる子もいるよ、という様子です。子どもの気持ちをいろいろ配慮してあげれば、抱けるようになる子もいるし、嫌いだけども面倒は見られる、嫌いだけどもさわることはできる、という指導をする必要があると、学生には言っています。そのなかで、実習も実施していますが、子ウサギを連れて行くと、大学生でもすごく楽しそうな表情をします。聞くと、「ウサギってこんなにかわいいと思わなかった」という答えが返ってきます。学生たちは、学校のウサギについて、くさい、汚い、逃げる、という印象しかもっていなかったようです。そんな学生さんが教師になって、学校の飼育動物をよく扱ってくれるはずがありません。これから、飼育を動物介在教育として考えたらどうなのか、というように考えています。

（教育計画に基づいて）

まず、学校の飼育は計画的な飼育管理が必要なんだということです。教育計画に基づいて、学校は子どもに何を教えるためにどういう動物を飼ったらいいのか、動物種の選定から入らなければまずだめであるということです。では、学校の教育計画に基づいて、飼う動物が決まったら、それによって、生活科の指導案を決めて、どういうふうに子どもに勉強を教えていこうかという、話し合いをしなくて

はなりません。ここからスタートをして、まず、動物を飼うんだったら、飼育と栽培をかねて、食用植物、ウサギだったら何が好きかを考えさせながら、飼育栽培計画を立てるようにする必要があります。学校では乱繁殖をさせないで、交配・妊娠・出産の計画を立てること、生まれた子ウサギの面倒をどのようにみるかの計画を立てること、歳とったウサギの管理の計画を立てること、このようなことをみなさんで考えていただくことが必要です。このような計画の中から、地球にはたくさんの野生動物たちがいて、その動物たちとどのように暮らしていけばいいのかというようなことに発展していくような計画も必要だと思えます。

（動物管理基準の作成のポイント）

では、実際に動物管理基準の作成のポイントはどういうことかと言いますと、獣医師の立場で考えているのは、まず、生活科等の授業で、生命尊重の教育が、動物嫌いの原因にならないような配慮をする必要があります。たとえば、アナウサギが3キロにも4キロにもなって抱けなくなってしまったり、穴を掘って逃げていってしまったりしないような状況にすることが必要なのです。次に、子どもが動物の親代わりになって、親身に世話ができるような、小さな動物で、温厚な性格をもった動物を選ぶことが必要です。三番目には、これが一番重要なことだと思っているのですが、小学校1年生の年齢、体力、地域の状況など、いろいろなことから考えて、動物種を選ぶことが必要です。最後には、教育計画によって、飼育年数と頭数を決めることです。教育計画の中で飼育計画を作らないために、計画性のない飼育が行われ、多頭飼育になってしまうようなことがあってはいけません。

群馬県獣医師会が平成10年度から、**目的にあった動物種を選び**、小学校生活科で飼うのに適している動物を選定することを提唱しています。ここにいるのがホーランドロップというウサギの種類です。体重が1.5キロくらいで、非常に温厚な性格です。学校のアナウサギは、だいたい3キロ~5キロくらいで、ホーランドロップの倍以上の重さになり、性格も荒いことが多いです。こちらはプチッココといって、800gくらいの愛玩手乗りニワトリと呼ばれていて、高知県で開発をしています。

現在、県の教育センターと獣医師会との連携によって、教室内でホーランドロップのような飼いやし動物を飼うことによって、命の教育実践を行おうという活動をしています。教室内で飼育することによって、小さいうちから躰を行うことができ、そうすることによって、人間の手からエサをとるような、人なつっこいウサギになっていくんです。**ただ放ったらかしにしておいて、愛情もなく育てると、先ほどの脳科学の話にもありましたが、逃げようとか、攻撃しようとか、そんなことしか考えないウサギになってしまいます。**

この写真を見てください。このウサギは小麦が大好きで、小麦を見せると遠くから走って寄ってきます。こんなかわいいウサギを、子どもたちが世話することができたら、喜ぶと思いませんか？

ウサギの巣作りを知っていますか？ウサギの妊娠期間は30日で、妊娠15~20日くらいになると、わらをいっぱいくわえて巣作りをしたり、手を出したりすると怒ったりします。こんなことも、飼育体験のなかで子どもたちは見たり感じたりすることができるのです。

この写真が実際の出産シーンです。これが子ウサギで、これが胎盤です。これを見て「気持ち悪い」という方もいらっしゃるかもしれませんが、これを子どもに見せるとすごく感激します。お母さんが胎盤の処理をしたり、小さい身体で子ウサギの面倒を一生懸命見たりする姿に、子どもたちは感動するんでしょうね。

生まれて1日目、手のひらに乗るくらいまでになりました。これでだいたい40gくらいです。ウサギによっては、育児放棄をする個体もいますが、先ほどもお話したように、ウサギに躰をきちんとすると、生まれた赤ちゃんにさわっても大丈夫になるんです。

お母さんウサギは、出産直前に、おなかの毛を抜いて巣作りし赤ちゃんをそこに産みます。それで、5日目くらいになるとこんなに大きくなります。

ウサギは、1日1~2回、5分か10分くらいしか授乳しません。授乳後の赤ちゃんを揺すってみると、おなかの中でミルクが動くのが見えたりします。是非このような体験を子どもたちにさせてみてください。

ウサギでも性格はいろいろあって、性格がきついウサギは、子どもでも人間の手を出すと噛んだりすることもあります。だからやはり、目的にあった動物種を、温厚な動物が実際にいるんですから、このような動物を活用する必要があると思えます。

生まれて10日くらいすると目が開いてきます。子どもが観察すれば、「いつ目が開くの？」などと、いろいろな関心が出てきて、先生と子どもたちで予想を立てあったりしながら、お互いの信頼関係が深まっていったりするんです。

生まれて20日くらいになると、わらを食べたり、牧草を食べたりするようになります。子どもたちがこれを見れば、ウサギが草食獣であることを、体験をとおして発見したりするわけです。

この写真は授乳しているところです。これは、写真を撮るために、お母さんウサギを寝かせているんですが、子どもはおっぱいが欲しくて欲しくて、身をよじらしておねだりしています。せっかく出産させるのであれば、このような体験を是非、子どもたちにさせてあげたいです。動物飼育に対してみなさんの深い理解があれば、こういう状況を子どもたちに見せることができるわけです。これこそ、動物介在教育、命の大切さの実体験だと言えるのです。

(うさぎの好物の実証)

この写真のウサギはずかちゃんといえます。では、大きくなったら何を食べるんだろう?ということですが、小学校に行って、「ウサギさんの好きな食べ物 何?」と聞くと、「ニンジン!」という子が8割くらいです。これは日本人の特性で、好きか嫌いかわからなのに、図書やテレビなどから得た情報をもとにして、「ウサギはニンジンが好きだ」と決めつけてしまうんです。ウサギも性格が皆違うように、食べ物の好き嫌いも当然あるわけです。それを見極められるような、飼育体験をさせることが大切です。

そういう体験をさせるためには、やはり最初の段階が大切です。その段階で、是非、獣医師と連携していただいて、動物飼育の基礎基本を学んで、みなさんの指導力を向上させることが必要だと思います。

学校での飼育の引き継ぎは、掃除当番などは比較的しっかりとしていますが、計画的な飼育に関しては、まだまだ研究不足で課題が多い状況です。

この写真は群馬県の教室飼育の例ですが、1, 2年生で飼ったウサギをまた新しい学年に引き継ごうという試みをしているところです。

また、理科においては、動物の身体の違いなどを観察させることもできます。これはウサギの頭のレントゲン写真ですが、「ウサギの歯は何本?」と聞くと、たいていは上2本下2本で4本と答えますが、実際にはご覧のように、前歯の後ろにも2本あって、合計6本のはがあることがわかります。これを子どもたちが見ることによって、「これはどうして?」というような疑問が出てくるのです。また、前歯の後ろには歯が生えていなくて、なぜ奥歯がこんな形をしているのか、など、題材を投げかけてあげないと、子どもは不思議に思わないんです。また、ウサギの首の骨と人間の首の骨の比較を試みたりして、学年ごとにこのような学習の計画を立ててあげることがいいのではないかと思います。

(動物ふれあい教室)

群馬県では、道徳教育を含めて、命の大切さを学ぶ体験ということで、こういった計画的な飼育をさせ、子どもに直に命の大切さを教えるような指導に取り組むようにしています。群馬県では、「動物ふれあい教室」といって、1, 2年生の生活科の授業で、TT方式で学校の先生と協力しながら、単元テーマを決めて、事前事後学習も含めた教育計画を立てて行っている事例を簡単に説明します。これが事前学習です。動物の絵を描こうという授業です。次の本学習では、獣医師と先生方で相談して、グループ学習にしようと思ったものです。ウサギをひっくり返すと、おとなしくして動かなくなったりするところを観察したりします。また、ウサギの前後のあしの指の数を数えたり、心臓の音を聞いてみたりします。小学生に聞くと、みんな「ウサギ大好き」と答えるんですが、この写真の子を見るとあごを上げていることがわかります。やはり、首の方までウサギが上ってくると怖いのかもかもしれません。この子の場合、大好きではなく、「ちょっと好き」くらいなのでしょう。指導者は、こういうこの場合、これ以上上に行かないように手を貸してあげるとか、そういった配慮が必要です。

この写真は、ウサギを嫌がる子のためにタオルでくるんであげているところです。ウサギが嫌いな子は「抱っこする?」とウサギを差し出すと、手を後ろにまわして、身体をのけぞらせたりします。こういうこの場合は、ウサギがあまり得意じゃないんだということを、みなさんが理解する必要があります。

子どもがウサギをいやがる理由は、「ひっかくから」、「急な動きをするから」というのが、嫌いな原因の9割です。だから、ウサギを嫌いにさせないために、いろいろな工夫が必要になります。最終的には、こういった室内飼育に挑戦してみたいかがでしょうか、ということをおみなさんにお伝えしたいと思います。

室内飼育をして、アレルギーなどが心配であるとするれば、学校の玄関であるとか、軒先であるとか、できるだけ身近な場所で飼育する工夫をすればいいと思います。そして、これからは、いかに指導案をつくって、子どもたちのためになる実践を行うことが必要です。

この写真の子は、ニワトリの人工飼育を行って、孵化したときに一緒にいた子で、ニワトリにとってはお父さん(お母さん)のような存在になっています。この子が近くに寄っていくと、頭の上に乗ってきたりするようになりました。こういう体験を子どもたちにたくさんさせることが大切なことです。

（最後に）

動物はかわいいだけでなく、それが食べ物にもなるという事実があるのです。こういう状況をいかに子どもたちに伝えていくか、動物介在教育の重要性を認識して行ってほしいと思います。そこで子どもたちは何を学ぶのか、何を学ばせたいのか、動物とのかかわり方が深くなると、動物に対する意識がどう変わるのか、変わった場合、心に響く飼育とはどのようなものなのかを考える必要があります。さらに、食物連鎖があることや、地球という大きな規模で、自然や動物を考えていくことができるような子どもを育てる必要があります。まいた種が大きく育つように子どもを育てたいということが、動物を飼育することの大きな意義になるのです。

ですから、みなさんは、動物飼育の基礎基本について、子どもの発達の心理段階からきちんと学んで、指導者としてどうあるべきか、指導案をどう作成するべきか、よく考えなければならない時代になったということがいえます。

以上で終わりにいたします。

[講演要旨のページに](#)